

第 228 回市民医学講座

平成 4 年 3 月 19 日 (木)

仙台市役所 6 階会議室

難聴 (お年寄りの耳の病気)

仙台市立病院耳鼻咽喉科部長

沖津卓二

1. 耳の構造ときこえのしくみ

空気を伝わってきた音は耳介で集められ、耳の穴(外耳道)に導かれ、強さが約 2 倍に増幅される。音は更に鼓膜に伝わり、中耳にある耳小骨によって内耳(蝸牛)に伝えられる。中耳では約 20 倍に増幅される。内耳から脳神経のひとつである聴神経により大脳の聴覚(きこえ)中枢に伝わる。これらの音の伝わる経路のどこかに異常があればきこえが悪くなる。耳が二つあるのはスペアとしてではなく、音の方向を知るのに必要なためである。

2. 難聴の種類

難聴には外耳道、中耳に原因のある伝音難聴と内耳から中枢に至る経路に原因のある感音難聴がある。前者は治療や手術などによって聴力の回復が可能なことが多い。また補聴器も有効な場合が多い。一方後者は治療によって治るものは極く一部の疾患をのぞいて殆ど無く、補聴器に頼らざるを得ない。老化による難聴は後者に属する。

3. 老化ときこえ

1) 老人性難聴

耳にも他の臓器と同様に老化現象がある。老化は生理的な現象であるが、年齢変化に伴う生理的な聴力変化を広義の老人性難聴と言っている。この生理的な変化の範囲を出たものにも、病的であるとして老人性難聴(狭義)と言う場合もある。

2) 年齢による聴力変化

平均的には 50 歳すぎから始まる。一般に 4000、8000Hz など高い周波数から低下し始めるが、8000Hz 以上の周波数では老化の始まる年齢以前から聴力が低下する。難聴が進行すると中音域から低音域の聴力も低下してくる。年齢による聴力の変化には発現する年齢や変化の程度に個人差がある。また、男性より女性のほうが悪化傾向が少ない。

3) 老人性難聴の特徴

発症は非常に緩徐であり、徐々に進行し、左右同じ程度に聴力が低下する。“物音は聞こえるが、言葉がききとれない”ということが大きな特徴である。これは周囲に騒音がある時に顕著となり、外国ではカクテルパーティー難聴といわれている。若者と同じ程度の難聴でも言葉の聞き取りが悪い。このような特徴は、老化の病変が内耳のみでなく伝導路の神経細胞の萎縮、大脳皮質細胞の萎縮などに起因している。

4) 生活環境の関与

老人性難聴は純粋に老化の影響のみかということ、それに至るまでの騒音とか食生活など生活環境の影響を無視できない Rosen(1962)の調査によると、スーダン共和国のまったく騒音のない未開地区に住む Mabaan 族の聴力は、文明国アメリカに生活している人々と比較して、加齢によってもその変化は軽微であったという。また、Mabaan 一族の血圧が加齢によってもほとんど変化せず、高齢になっても子供と変わらない値を保っているのに、アメリカ人では健康者といわれる人達でも 40 歳を過ぎると明らかに血圧は高くなってゆく。この両民族の聴力の差は環境騒音の影響だけでなく、高血圧や動脈硬化など身体条件が難聴を促進させる因子として何らかの関与をしているようである。

5) 対策

予防方法はとくにないが、高血圧、動脈硬化など老人性難聴の発現を早め、あるいは促進させる可能性のある疾患にかからないように注意することであろう。騒音に対しても日頃から注意を払うことが必要である。難聴になってしまったら、補聴器を使用することになる。補聴器の性能が大分向上したとは言え、やはり強力な意欲や強固な意思が必要であり、周囲の協力も大切である。補聴器を使用し始める時期であるが、難聴が高度になってから使用するより、軽度のうちから使用して慣れておいたほうが効果が大きいといわれている。お年寄りの場合には小さい補聴器は適さない。記号やスイッチ類が小さく、見にくく操作しにくいからである。多少格好は悪くとも、箱型が良い。マイクを話し手の方にむけて、はっきりした言葉で、ゆっくりと話してもらうことが肝要である。耳のそばで大声で話すことは良いことではない。音だけが大きく響いて言葉は聞き取れない。

4. その他

- 1) 耳垢栓塞や滲出性中耳炎もお年寄りに案外多くみられる。これらは治療で治るので、年のせいとあきらめないで、一度は耳鼻科を受診して欲しい。
- 2) 耳鳴とめまい、外耳道掻痒症などについても簡単に解説した。